

カンタン・メイヤースーの思弁的唯物論(Matérialisme Spéculatif)  
河野 勝彦 (無所属)

21世紀に入ってから、ヨーロッパで新しい実在論の動きが起きており、「思弁的実在論(speculative realism)」と言われたり、「新実在論(new realism)」と称されたりするが、そのなかでも、フランスのカンタン・メイヤースーの唱える「思弁的唯物論(matérialisme spéculatif)」が注目を浴びている。

唯物論とは、エンゲルスが『フォイエルバッハ論』の中で定式化しているように、思考と存在、精神と自然との関係において、後者を根源的なものと見なし、しかも思考が現実の世界を認識できると主張する立場であるが、メイヤースーもまた、この唯物論の立場を継承する。しかし今日、この唯物論の立場を、説得的に展開することは極めて困難な作業である。

メイヤースーは、唯物論の立場を主張するためには、観念論ではなく相関主義を批判することが重要であると見る。相関主義(corrélationisme)とは「我々は思惟と存在の相関関係にしか接近できず、切り離して捉えられたこれらの項の一つに決して接近することはできない」(『有限性の後で』)というもので、バークリ、カント以来の近現代哲学者が前提にしてきた立場である。相関主義は、思惟や言語から独立の物自体、即自存在を考えることはできず、相関の外に出ることはできない、「相関の循環(cercle corrélationnel)」を破ることはできないと言う。メイヤースーは、相関主義が唱えるこの相関の循環を否定するのではなく、それを認める。それを認めた上で、なお、その相関の循環を突破し、相関の外へ、大いなる外(le Grand Dehors)、絶対的な外(le Dehors Absolu)へ出ようとする。それを、デカルトのコギトによる形而上学的省察の論証過程に倣って行おうとする。

メイヤースーは、今日、宇宙や地球の誕生など、どんな通俗的な科学書にも記されている人類出現以前の出来事を「祖先以前の(ancestral)」な出来事と呼び、これらの言明は相関主義の言う循環を破っており、相関主義が成り立たないことを示していると言う。これは、『唯物論と経験批判論』第一章第四節「自然は人間以前に存在したか？」において、レーニンがマッハやアヴェナリウスに対して行った批判と同じものである。

また、相関主義が主張する所与の事実性、偶然性をそのまま認めたらうで、この偶然性の絶対的な必然性を思考に関わらない相関の外の絶対的な真理として認める。

すべての事物は、自然法則や論理法則も含めて、なぜそれであって他でないのかの理由はなく、それは事実、単なる事実性でしかなく、偶然的なものに過ぎない。自然法則は、たまたまその法則が安定的なしかたで維持されているに過ぎない。その点で、メイヤースーは、ヒュームの因果法則に対する批判をそのまま認める。

「所与(donné)の明らかな無償性の手前あるいは彼方には何もない。その破壊、その出現、その予防の、限界なしの法則なしの力以外の何ものもない」。所与において数学的に記述可能であるすべては、我々なしに、存続することができるのである。